

しが国際協力親善大使レポート

ひがしの
東野 真美さん

隊次：2016年度3次隊

職種：コミュニティ開発

派遣国：セネガル

プロフィール

外国語学部スペイン語学科卒。大学卒業後はメーカーの営業職として3年勤務後、高校時代より興味があった青年海外協力隊に申し込む。

企業の現職参加制度を利用し、2017年1月アフリカはセネガル、サンルイ州サンルイ市に赴任。

サンルイ手工業組合に配属され、そこに在籍するものづくり職人を対象に所得向上、組織力強化を目的とした活動に従事中。

セネガルという国

日本から飛行機で20時間程行った先にある、西アフリカのセネガルという国に住んでいます。首都ダカールは「アフリカのパリ」と称され先進国並みに発展している都市ですが、そこから車で2時間も移動すれば、壮大なバオバブの木が並ぶ中を井戸水の入ったバケツを頭に掛けて歩く女性の姿や、30頭を超える家畜を従え移動する人々の姿が見られる、そんな国です。

日本とは全く文化の異なる国に思えますが実は共通点も多く、その一つに食事が挙げられます。セネガル人の主食は日本と同じお米で、魚も好んで食べます。セネガルの国民食はチェブジェンと呼ばれ、魚で出汁をとったスープで炊いたご飯ですが、日本人の味覚と合い毎日食べても飽きません。大きい一つのお皿に盛り付けられたチェブジェンを家族全員で囲んで食べます。またおもてなし精神の豊富なセネガル人は、例え見知らぬ人でも食事中に人が来れば「おいて！一緒に食べよう！」と誘ってくれます。来た最初は知らない人に突然ご飯に誘われてびっくりした私も、今ではそんな優しいセネガル人にお世話になり、みんなの輪の中に加わってご飯を食べています。

セネガルでの活動

私は今、革職人や木彫り、仕立屋、銀細工師といった職人さんと、彼らの収入向上を目標

とした活動をしています。観光地として知られているサンルイにはヨーロッパなどから観光客が来るので、彼らに向けたお土産物として商品を新たに作ったり、彼らのお店にお客さんが来てくれるように市の観光案内所と協力してプロモーションをしたりしています。親から代々仕事を受け継いでいる彼らは、親に教わった通りの物作りは得意ですが、外国人がお土産に好きそうなもの、買いそうなものを知らないケースもあります。なので私は一外国人の目線から、お土産物に良さそうな商品製作を提案し、彼らと商品開発をしています。

活動を始めて1年が経ちますが、異文化からくる価値観の違いに驚き、学ぶ毎日です。例えば、商品開発でコップを乗せるコースターの製作を依頼した時。「お願いしていたコースターできた?」「まだ。3日後にはできるよ。」「じゃあ3日後にお願いね。」こんなやりとりを数回繰り返してもまだ作ってもらえず、モヤモヤしたある日職人から「私はコースターなんて使ったことないし、本当に売れるの?売れないものは作りたくない。」なんて本音を聞くことも。セネガル人はそもそもコースターを使いません。そして当たり前ですが、今すぐお金が必要な彼らは売れないものは作りたくないのです。なので、コースターは何のために使うのか、どうして売れる可能性があるのかを説明して納得してもらう必要がありました。他にも、お店にゴミが散らばっている状態がなぜ好ましくないか(セネガルではポイ捨てが日常茶飯事で街のあちこちにゴミが落ちています)、どうしたら職人が会議に来てくれるか(行くよ!と言いつつ当日来ないことが多いので毎回あの手この手考えています)、日本で培った「常識」の感覚をぐっところえて、彼らの話を聞き、彼らの目にはどう見えるのかを知り、どうすれば相手が納得してもらえるかを考える。そうしてチャレンジして、失敗して、たまに成功して、その繰り返しで格闘中です。

時には本気で腹が立ってきて、喧嘩になっちゃうこともあります。次の日にはけろっとした表情で「会いたかったよ一元気にしてた?」なんて話しかけてくれるおらかなセネガル人に、何かしら役に立てるように残り1年頑張りたいと思います。



セネガル料理を教わっている様子



国民食チェブジェン お米で炊いたご飯



こうやってみんなで囲ってご飯を食べます



活動先の職人さんと商品製作をしている様子



職人さんと一緒に作った小物たち

しが国際協力親善大使レポート

ひがしの
東野 まなみ
真美さん

隊次：2016年度3次隊

職種：コミュニティ開発

派遣国：セネガル

自己紹介

大学ではスペイン語を専攻、卒業後は製薬会社で営業職として3年半勤務後、以前より目標としていた青年海外協力隊に参加。2016年度3次隊コミュニティ開発として、セネガルのサンルイ市、サンルイ手工業組合にて活動中。

活動されている国、地域の気候や文化の紹介

セネガルでは傘をしません。雨が降るのは雨季の6~8月の3ヶ月だけ。それも日本のようなしとしと雨ではなく、バケツの水をひっくり返したような土砂降りの雨が降ります。一旦雨が降ると雨が止むまで学校も仕事もお休み。傘をさしてまで外に出ようとする人は誰もいません。雨季が終われば翌年の雨季まで、青空が広がりカラッと晴れた気持ちのいい天気が続きます。天気予報を見る習慣がなくなったので、日本に帰ったら困りそうです。

活動や生活について

セネガルに住んで2年目。赴任当時は全くできなかった現地語のウォロフ語も上達し、活動も進むようになってきました。現在、物作りを生業とする職人さんたちの工房兼販売所である「職人の村」に観光客を呼び込むような活動をしています。私の住んでいる街サンルイには世界遺産の島や国立公園があり、ヨーロッパを始めとする海外からの観光客が数多く訪れる観光地です。そんなサンルイですが、職人の村はあまり観光客に知られておらず、そちらを訪問するお客さんも多くはありません。なので、現在、旅行会社のツアーと提携したり、観光客に同行するガイドさんに職人の村にきてもらうようお願いしたり、観光案内所で職人の村の宣伝活動をしてもらったり、観光業の関係者の力を借りてお客さんを増やす作戦を実行しています。観光業関係者も、職人の村の存在は知ってはいるものの直接は関わったことのない人たちで、彼らとの新しいつながりを職人さんと一緒に作る仕事はとても面白く、もちろん上手いかないことの方が多いのですが、少しずつでも協力者が増えて、職人の村にお客さんが増えて、自分たちの活動に自信を持ち嬉しそうにし

ている職人さんを見ているのは私自身もとても嬉しい気持ちになります。

しかしながら、私のしていることといえば、観光業関係者の人と知り合い、仲良くなり、そこに職人を連れて行って紹介し繋がりを作るだけのもの。私の帰国後もその関係が続いて欲しいので、一度紹介した後のお仕事の仕方は職人さんたちに主導権を握ってもらって、私は後ろからサポートするだけです。この取り組んでいることは、実は、前職での営業の仕事ととても似通っているんです。似たような経験があるからこそ、今回こうやって観光客を増やすための取組が実行できて、加えて同じようなことをしていても、場所や人、文化が違うので私にとってもまた新しい発見や驚きがあります。過去の経験が協力隊活動のアイデアとそこでの新しい知見を連れてきてくれていることはこれ以外の活動でも実感することがあります。

製菓会社の営業とセネガルでの活動、最初は全く異なる分野なので心機一転新たな挑戦というような気持ちだったので、まさかセネガルでこれまでの経験が活けるとは想像していませんでした。そして同時に、これは今後についても同じことが言えるのかと思います。

なので、この協力隊での経験も任期が終わった後の仕事で、どのような形かは分かりませんが、必ず役に立つから、その時のために今最善を尽くして頑張ろう、と思うようになりました。「関係ないように見えても、これまでの経験は何かしらの形で今後役に立つ。」協力隊に来て学んだことの一つです。



活動方針について会議をする職人さん達



お昼ご飯を作っています。青空キッチン気持ちいい



お昼ご飯は外で食べたり中で食べたりみんなで話になって一緒に食べます